

結婚と嫁の立場

—— 民俗班（徳島民俗学会） ——

澤田 順子*

1. はじめに

先般行われた国勢調査の中間発表によると、藍住町は徳島県内トップの人口増の町である。町制50周年を迎えるが、藍園村と住吉村の合併当初の人口は約1万人だったのが、3万2000人にもなっている。徳島市のベッドタウンという地の利を得て、転入者が増加し、しかも若年者が多く活気のある町である。しかしながら、藍住町の昔の姿を知る住民は高齢化し、昔の暮らしの記憶が薄れつつある。

吉野川流域は江戸中期以降、藍作を盛んに行った所だった。タデ藍を染料にするには多くの工程があり、寝る暇も惜しむ過酷さであったと伝えられている。しかし、その作業に従事することで生計を立てていた人たちにとっては、欠くことのできない生きるための手段であった。第二次世界大戦後、農地解放が行われるまで藍商・地主と小作との貧富の差は歴然としていた。藍作は明治30年代をピークに、以後、安価な印度藍、化学染料、工業の近代化に飲み込まれ急速に衰退している。藍作の盛んだった旧藍園村でも米作、野菜類の栽培に転換を図っている。

今回の聞き取り調査を行った70歳代、80歳代の方たちは藍栽培に直接関わったことはないが、藍作業の状況を、子どもの時に見たり聞いたりした人たちだった。中には「そこに百姓の辛さを見た」と言った人までいた。

藍作はしていないが、米作と野菜類の畑作に転換した農家に嫁いだ嫁は、実際に藍作業の過酷な労働を経験した人のいる家族の一員となるには、どのよ

うな働き方を要求されたのだろうか。戦中戦後の結婚式のしきたりと共に調査をすることにした。

2. 結 婚

調査を依頼した人たちが結婚したのは丁度第二次大戦中、もしくは戦後の時期に当たる。昭和20年代初めは、食料・物資共に不足し、嫁入り支度をしたくてもできない時代だった。衣類なども新しいものを買ひ揃えることは無理だったが、当時としては精一杯の結婚式を行った。規模や内容は縮小されることはあっても、戦前の古いしきたりを踏襲している。物不足の時代を脱すると、再び婚礼は華やかになってきた。しかし、『藍住町史』（昭和40年発行）「第二章冠婚葬祭」（669頁）に「現在本町に行われている婚姻の風習は、江戸時代から継承されたもの」と書かれているように古いしきたりは守られている。

40年代になると、花嫁道具も何通り（藍住では棹さおと言わず「通り」という）、例えば戸棚一棹が一通り、それにタンスが加わると二通り「あそこは何通りの嫁さんを貰った」と自慢げに言うようになった。人が担にい棒でかついで婚家へ運んでいた時代から、次第に洗濯機などの電化製品も道具に加わり、飾り立てた嫁入り道具を自動車で運ぶようになった。

聞き取りをした人たちの結婚式の状況がそれぞれ異なるので、事例をあげ記すことにする。

事例1 大正10年生まれ 男性 元教師

第二次大戦で出征し、戦後昭和21年に結婚した。夫24歳、妻20歳、見合い結婚である。父親と仲人同

* 徳島市丈六町長尾62-8

伴で、夜、提灯を持って女性の家に行きお見合いをした。既に話が決まった段階の形だけのお見合いで、すべてが親任せ、跡取りだったので親の言うとおり、本人の意思の入るところはなかった。

家は農家で、幼児期に提灯の明かりの下で刈り取った藍を細かく切っている両親の姿を見ている。

事例2 大正13年生まれ 男性 商人

夫23歳、妻23歳で結婚した。当時の奥野、前川は、国道11号線が通り（今は違う）、銀行、呉服屋、料理屋、劇場などもあり、前川に行けば何でも揃うといわれた華やかな所だった。「受け方、取り方」（婿方）の家の広さによって招待客の数が違った。結婚式も派手で、大きいところは三座（3回客が入れ替わる）客を呼んだ。一座は近所や手伝い人たち、二座目は嫁と本客。近所の家で休憩している本客を、受け方が用意した黄色の手ぬぐいを肩に掛けた一座目の人たちが、芸者の引くゾメキに合わせて阿波踊りを踊って迎えに行き、婿の家に踊り込む。これで一座目は解散し、二座目となる。

嫁はまず仏を拝み、座敷で三々九度の盃、親族の固めの盃が終わると宴席となる。嫁は姑に連れられ、風呂敷などを土産に「初あるき」近所回りをした。

宴席が終わりに近づくと、「ミズノモン（水の物）」といって大根で作った鶴や亀の縁起物、饅頭や果物などのご馳走を飾った「ソウボン」に赤いタスキを掛けて「高砂」を謡いながら曳いて出る。これは料理人の腕の見せ場であったそうだ。朱塗りの大きな盃「とりの盃」で本客の宴会は終わる。

三座目は町の有志を呼び結婚の宴は終わる。

事例3 昭和7年生まれ 女性 農業

知人が家同士の格が見合うからと縁談を持ってきた。娘の家に世話人が若者と男親を連れてくる。娘はお茶を出すだけ、その時に若者は娘の容姿を見るのが見合いである。お膳が出て、若者が吸い物を飲んだら話ができたと言った。結婚を決めるのは親が80%。ひと月もしない内にノシイレ（結納）となる。春に見合いをすると収穫後、正月までに結婚となる。その間に二人の交際が始まる。（昭和30年ころの結婚で20年代では交際期間などの話はなかった）婚礼は地域全体の楽しみであった。

大きい家では2日も宴席が続くこともあった。本

客の人数は嫁を加えて偶数とする。帰りの人数が割り切れない奇数にするためである。嫁は玄関で姑に迎えられ、本客は表から、芸者の弾く三味線のぞめきで婿の家に入る。初あるきが終わると嫁は常着に着替え、エプロンをして台所を手伝う。

「五日帰り」、「婿入り」などで嫁の出里に行く。

3. まとめ（結婚）

婚姻の習俗はこれまでに調査した土成町などによく似ている。「ミズノモン」をエンヤ、エンヤと囃しながら曳くのは県北部に多い。床入りの儀式「一国、二国、三国一の嫁をとりすました」の言葉はあちこちでよく耳にする。ゾメキで花嫁が迎えられる「踊りこみ」は、県南では聞いたことがなかった。

「エリ飾り」は花嫁が持ってきた道具を結婚式後座敷に飾り、近所の人たちに披露して見てもらう行事のことだが、最近はあまり行われていないようだ。

現在では恋愛結婚は当たり前になっているが、昭和20年代くらいは「カカリアイ、なじむ」と言って、周囲から結婚を認められるのは困難であった。見初められて親に結婚を申し出たが反対された人もある。仲介者が説得して、結婚はできたが、90歳になる今も「あの人はカカリおうて結婚した」と言われているそうだ。また「なじんで結婚した」ともいう。「イキゾメ」（足イレ婚）も結構あったらしいが、具体例を聞くことはできなかった。

嫁は婿の顔もはっきり知らずに嫁ぐこともあった。

4. 嫁の立場 —経験から—

事例1 大正7年生まれ 女性 農業

結婚したのは22歳、夫25歳。10月の田圃の忙しい時に嫁に来たので、嫁入りした直後から田に入り働いた。田植えはソオトメ（早乙女）さんを、稲刈りには日雇いを雇っていたが「嫁はヒヨさん（日雇い）として来たのと一緒だった」と話す。

女はよく働いた。男性と同様に田の仕事、力仕事もした。それ以外に女は家事もこなさなければならなかった。朝は4時に起きて食事の支度をし、子育てもした。休む暇などなかった。

事例2 大正15年生まれ 女性 農業

昭和20年4月、戦争の激しい時で両家の畑（ゴボ

ウ、サトイモ、大根などを作る)が近くにあったことから、見合いをすることもなく結婚の話は決まった。嫁入り道具を買うことはできず、親が麦、米をタンス屋に持って行き、タンスと交換してもらったのを嫁入りに持ってきた。道具は荷車で運んだ。蚕を飼っていたので、貯めてあった地絹を染め衣装として持って来た。裾模様の婚礼衣装は知人から借りた。何も売っていない、買うものもない、小遣いもない。これが嫁として当たり前のことだった。

農家は人手がなく「手間が増えたな」と近所の人が言うくらいだ。婚礼の翌日から畑仕事をした。

事例3 昭和12年生まれ 女性 農業

昭和32年一人娘だったので養子を貰った。子どもの時から母よりも、祖母から「仕事をしろ」と使われ、百姓をしてきた。昔は藍を作っていた。藍ほどせこい仕事はないと今も思う。

動力として牛を使っていたが、結婚してすぐ耕運機を使うようになり、耕作が楽になった。子どもは保育所に預け、あいた時間で「ワラむしろ」を織った。業者が買ってくれ43年ごろまで続けた。現在米だけでなく花、トマト、水耕トマト、カリフラワーなどを作っている。

思い出は3月3日のひな祭り、遊山箱にご馳走を入れてもらって旧吉野川の乙瀬まで行ったりした。祭りはご馳走があって楽しかった。

5. まとめ(嫁の立場)

ここで藍住町婦人会が調査し出版した『阿波藍—婦人の生活と労働—』(昭和51年1月発行)から、女性たちの生活状況を拾い出してみたい。事例1、2、3の祖父母、両親の時代のことである。

1) 嫁のしつけ

「生え抜き(家の息子や娘)は敷居、嫁は他家から来たものだから障子。障子は削って敷居に合うように入れなければならぬ。嫁はワラと同じで、はしやげないで(跳ねないように)打って使え。」(22頁)

2) 仕事しの嫁(よく仕事をする嫁)

「仕事しの嫁は夜12時まで仕事をし、地下足袋のまま寝る。ゲーといったら起きる。寝る時間は2時間である。一番鎌で藍を刈る。」(23頁)

3) 農家のお産

「農家の嫁は臨月の大きなお腹でも藍刈りの時は

仕事をしなければならなかった。7月の暑いさ中、夫婦で藍刈りをしていると、急に嫁さんが産気づき、家へも急いで帰ることができず、畑で赤ん坊を産んでしまった。できた児をやむを得ず腰巻に包んでふごに入れて夫が持って帰ったという。」(24頁)

4) 嫁の病気

「嫁は病気になっても、なかなか医者などに掛かれなかった。民間でよい方法を教えてもらって治療した。辛抱できぬほど苦しい時は里へこっそりと知らせ、何か用があるようにみせて助けを請うと、里の親が医者連れて行ってくれた。里が医者に掛けたのだからと、代金は払ってくれなかった。」(27頁)

6. おわりに

藍住町の婚姻のしきたり、嫁いだ嫁の状況について記してきた。農家の嫁は休む暇もなく働いていた様子が伺える。しかし、調査に応じてくださった方たちはみな明るく大変な時期のことを事も無げに話してくださった。現在はそれぞれ色々な趣味を持ち、話を聞くスケジュールの調整が難しい状況だった。でも、なぜかほっとした思いで調査を終えた。

最後に、激しい労働の疲れからくる眠気を覚まし、仕事の能率を上げるために歌われた沢山の「藍こなし歌」の中から、嫁に関するものを抜き出してみる。話を聞いた方の一人は「中学校で生徒たちに歌って聞かせるのだ」と楽しそうに語った。

好いて好かれて親子も承知
 藍が売れたらお嫁入り
 嫁の悪口いうて歩く姑が
 孫が可愛い気が知れん
 娘子でない嫁こそ子なれ
 娘世間の人の子よ
 わたしゃかかささん藍園いやよ
 夜水取るのがせこござる(水とり歌)

今回の調査に快くご協力くださった次の方々にお礼を申し上げます。(敬称略、順不同)

小林 和子、森川喜久子、勝野カネ子、山田 民江
 宮本 武文、黒田富美子、近藤 武雄、中内 敬子

参考文献

藍住町史編集委員会(昭和40)『藍住町史』
 藍住町婦人会(昭和51, 56)『阿波藍』